

説教者マイスター・エックハルトの合一に関する研究

石川, 充ユージン

<https://hdl.handle.net/2324/7363550>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名	石川 充ユージン			
論 文 名	説教者マイスター・エックハルトの合一に関する研究			
論文調査委員	主 査	九州大学	教 授	小黒 康正
	副 査	九州大学	教 授	大西 克智
	副 査	九州大学	准教授	田口 武史
	副 査	東北大学	教 授	嶋崎 啓

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

マイスター・エックハルトは、中世ドイツのキリスト教神学者であり、同時に説教者であった。神と人間との理想的な関係を繰り返し聴衆に伝え、神学上の公用語であったラテン語だけではなく、当時の民衆語であったドイツ語を用いて、多くの説教を残した人物である。しかしながら、従来の研究では、説教者としての側面が見落とされるか、もしくは過小評価されてきた。本論文は、マイスター・エックハルトを神秘主義者や哲学者としてではなく、説教者として捉え直すことで、その思想の眼目である神との合一を新たに明らかにしたのである。

新たなエックハルト論をめざす本論文は、まず第一章において、無の概念に着目して、エックハルトにおける存在論を問う。エックハルトによれば、無は神と被造物の徹底的な区別を可能にするだけでなく、存在をもたらす神とその存在なくしては無である被造物を緊密に結びつける。この架橋によって、神と被造物の一切が存在によって一なる世界を共有するという世界観が成り立つ。エックハルトは、説教を通じて、万物に内なる神を捉える境地へと聴衆をうながす。次に第二章では、従来の否定神学的な理解とは異なり、エックハルトが「一」や「否定の否定」という表現を通じて神を豊かに語っている点に着目し、神が万物を包括する悪も無もない世界観を明らかにする。ドイツ語著作『教導講話』を考察する第三章によれば、エックハルトは、具体的な事物の嘆願ではなく、神の恩寵のみを求める祈りを説き、意志の側面においても神との合一をめざす。神の恩寵を徹底的に受容する態度は、エックハルトにとって、人間の存在根拠となった。そして最後の第四章は、エックハルトが聴衆に自らの教えを把握させるためにとった手立てを扱う。エックハルトにとって重要なことは、説教の言葉を論理的に把握することではない。むしろ、人間が常に「副詞」として神に付き従うような位置関係を聴衆に伝えることで、誰に対しても平等に開かれた神への道、知識を前提としない合一を示すことだったのである。このように本論文は、説教者としての使命を考慮に入れながら、エックハルトの思想を考察した。神との「一」なる世界観を聴衆に自覚させることこそ、エックハルトにおける説教のねらいであったのである。

以上のとおり、本論文はマイスター・エックハルトを説教者として捉え直す斬新な観点と文献学的な手堅さからなる秀逸な論攷に他ならない。しかも、本論文の考察は、ドイツ語のみならず、中高ドイツ語、ラテン語、英語の確かな読解能力に支えられている。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力をもつことをここに認める。